



Title	ベトナム人日本語学習者に対する効果的漢字指導法
Author(s)	Phan, Thi My Loan
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58803">https://hdl.handle.net/11094/58803</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	Phan Thi My Loan
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	甲 第 6 6 号
学位授与年月日	平成18年9月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ベトナム人日本語学習者に対する効果的漢字指導法
論文審査委員	主 査 教 授 富 田 健 次 副 査 教 授 藪 司 郎 副 査 教 授 宮 本 マラシー 副 査 教 授 奥 西 峻 介 副 査 教 授 佐々木 猛

## 論文の内容要旨

これまで、日本語学習者に対する漢字指導に関する教科書は日本国内を始め、世界中で数多く出版されている。これらの教科書では、漢字は、画数が少ない字から画数が多い字へという順で教えることが多い。つまり、漢字自体の難易度の低い字から教えられている。このような指導法は非漢字圏の日本語学習者にとっては効果的だと思われる。しかし、元々漢字圏に属していたベトナムの日本語学習者にとってはそうではない。漢字は約千年にわたる「北属期」と呼ばれる、中国がベトナムに統治政権を置いた紀元前2世紀から紀元後10世紀初期まで、ベトナム語の中に導入され、20世紀初期まで用いられていた。その結果として、現在、漢語由来の語彙はベトナム語の語彙の7割をも占めると言われる。

筆者は漢字語彙を学習してきた経験とベトナム人向けの日本語教育に携わってきた経験から、ベトナム人学習者に見られる漢字学習に対する嫌悪感及び拒否感を引き起こす元となる困難がよく理解でき、ずっと前からこの嫌悪感及び拒否感を解消しながら、日本語の漢字語彙を効率的、且つ楽しく学習できる方法を探り続けた。そして、修士課程在籍中の2年間、日本漢字音と越南漢字音の間にある音声的な対応関係を考察・分析した。文字データ収集方法で集めた日本漢字音と越南漢字音の韻母及び声母を分析し、初級レベルのベトナム人日本語学習者に対して越南漢字音を活用した効果的な漢字指導法を提案した。

しかし、この研究では現代の日本漢字音と現代の越南漢字音を直接比較したのみであったために、限界があった。また、修士論文で導入しようとした漢字は初級レベルのベトナム人日本語学習者を対象としたものであったため、その数も非常に限られたものにならざるを得なかった。しかも、音声的対応関係のみに終始し、漢字の意味については結局何も触れることができなかった。

本論文は上述のような様々な反省点を踏まえて、新たな解決法を探るために行った研究

をまとめたものであり、その構成は以下のようなものである。

序論では、研究の背景、研究の範囲及び意義、論文の構成、参考とした主要な文献、使用した記号及び標記について述べた。

第1章では、これまでの研究とその問題点を述べた上、その解決法について考察を加えた。

第2章では、前章で述べた第一の問題点を解決するために、修士論文の附録そのものの問題点を洗い直し、修正を加え、不足を補充した後、そこに採録したすべての漢字を先ずは日本語声母を中心として、ア行→カ行→ガ行→サ行→ザ行→タ行→ダ行→ナ行→ハ行→バ行→マ行→ヤ行→ラ行→ワ行の順番に並べ、日本漢字音と越南漢字音の間の主として声母の間にある対応関係を浮き上がらせ、統計学的手法を用いて分析を加えた。また、分析結果からベトナム語声母に対して日本語声母のいずれが最も多く対応するのか、対応例の数の多いものから表にして示した。

第3章では、本論文で新たに附録2で示す表を作成し、今度はベトナム語音韻母の韻核である母音を中心として、それらを a/a/, oa, ua/wa/, ä/ä/, oä, uä/wä/, â/â/, uâ, uô/wô/, a, e/é/, oa, ua, oe/wé/, ê/ê/, uê/wê/, i, y/i/, uy, ui/wi/, iê, yê, ia/iä/, uyê/wiä/, o/o/, ô/o/, ô/v/, u/u/, uô/uä/, u/w/, ư, ư/wä/ の21種の母音字母及び二重母音字母を含む漢字の順に並べ替えた後、それらの漢字の日本語現代音のみならず、一部は古代音にまで遡せた上、日本漢字音と越南漢字音の韻核の間にある対応関係を浮き彫りにし、統計学的手法を用いて分析を行った。この分析結果からベトナム語母音に対して日本語母音のいずれが最も多く対応するか対応例の数の多いものから表にして示した。

第4章では、二番目の問題点を解決するために、1981年10月1日に内閣によって告示された『常用漢字表』を基準にし、漢字の数を大幅に増やして第2章と第3章で分析して得た結果に基づき、漢字をステップ1, 2, 3, 4と4つのステップに分けて導入することにした。また、選抜された漢字を含む熟語をも調査し提示した。

第5章では、三番目の問題点を解決するために、日本語とベトナム語の両言語に共通して存在する熟語、日本語だけに存在する熟語をできる限り集め、附録3で示すような表を作成し、両言語に共通して存在する熟語の場合はその異同を分析・考察し、日本語だけに存在する熟語についてはベトナム語に訳出して、できるだけベトナム人に豊富な漢語熟語の情報を提供することを目指した。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、非漢字圏外国人日本語学習者にとって最大の難関の一つとされる漢字学習を効率的かつ楽しく行える方法はないものか、一人の外国人日本語教師の立場から考察しようとしたものである。

非漢字圏とは言っても本論文の執筆者はベトナム人であり、ベトナムは元来漢字圏の国であり、今から 100 年ほど前までは漢字を公式の文字として使用してきた歴史があり、現在でこそ正書法としてローマ字を採用してはいるが、彼等ベトナム人の使用する語彙のおよそ 7 割は依然として漢語である。

今は非漢字圏に分類されるこのベトナムで、他の非漢字圏で用いられるのと同様の方法で日本語漢字教育がなされていることに疑問を覚え、それだけでなく漢字学習の困難さに耐えられず途中で日本語学習を放棄してしまう生徒の多さから、何とかこの現状を打開する方法はないかと、筆者が目をつけたのが漢字の読音つまり漢字音であった。

「態度」は「ターイドー」、「注意」は「チューイー」、「意見」は「イーキエン」。ベトナム語と日本語ではその漢字語の読音に極めて類似したものが数多く存在する。漢字の知識は全くない人々であるが、聞いただけでその意味は直ぐに分かる。しかし「態度」などは筆画の少ない漢字から教えることを旨とする漢字教育からすると可成りレベルの高い漢字語であろう。筆者はこの漢字教育のレベルを一旦棚上げして、近似の音を持つ、ベトナム人にとって覚え易い漢字語から導入したらどうかと考えた。

そして、日本語で「タイ」と発音する漢字が他にも「太」や「泰」、「貸」、「胎」などあることに気付き、それらもベトナム語で、声調はやや異なるものの、ほぼ同様に発音されていることを突きとめた。つまり、日本語とベトナム語の漢字音読に一定の対応法則があることを知ったのである。しかし、一方、ベトナム語では同様に *thai* /t'aj/ のように発音するのに、日本語では「猜」や「彩」「蔡」などのように、「タイ」ではなく「サイ」の音を持つ漢字があることも気になる。ベトナム語と日本語でその音読にやや隔たりが見えてくるのである。

修士論文の段階では、ベトナム人として、ベトナム人日本語教師として「感覚的に」近似の音を持つ漢字を集めてそれをステップに分けて教えることを提案したが、そのステップ分けの「感覚」に審査の過程で批判が集中した。

そこで本博士論文では、先ずはその「感覚」が本当に正しかったのかどうかを検証するため、ベトナム語と日本語でその対応例を数量化してみることを試みた。例えば上の日本語音の「タイ」の「タ」にはベトナム語でどの頭子音が対応することが多いのかを数量で示してみようと言うのである。すると、この「タ」には確かに上の例のように *th\_* /t'/\_/ が 4 例あり、*d\_* /d/\_/ も 4 例、*tr\_* /c/\_/ 3 例と続くが、「タ行」全体で見ると、全く逆転して *tr\_* /c/\_/ が 23 例、*d\_* /d/\_/ が 17 例、*th\_* /t'/\_/ が 14 例という結果になってしまう。所期の「感覚」はやや裏切られてしまう。

それならば、逆にベトナム語の *th\_* /t'/\_/ は日本語のどのような頭子音を持つ漢字と多く対応するのか調べてみた。すると、何と、「サ行」との対応が 37 例、「ザ行」との対応が 19 例と最も多く、「タ行」との対応は 14 例に留まるという結果になり、ここでも所期の「感覚」はやや裏切られてしまうのである。

このことは頭子音を除いた音節の残りの部分つまり韻母の *\_ai* /*\_aj*/ についても同じで、同じ韻母の漢字が日本語で、「ケイ」(「啓」)と読まれたり、「ヒ」(「罷」)と読まれたりする。つまり「アイ」だけでなく「エイ」や「イ」の音を持つことも今回の調査で改めて判明した。

このように対応例を数量化して示せば示すほど、素朴な「感覚」から遠ざかってしまうのであるが、兎に角、綿密な対応調査の結果を基に、「感覚」ではなく「数量」によって対

応規則を明確化し、それによって日本語漢字学習のステップ分けを試みようとしたのが本研究の最大の目的であった。

東アジアの音韻分析の一般的手法である、各音節を声母と韻母に分け、声母についての日本語音との対応、韻母についてのそれを、現代音のみならず一部古代音にまで遡らせた上で徹底的に調べ上げたことは評価に値する。

更には、これを単純な漢字の発音の問題に留めず、意味を持った二音節以上の所謂漢字語（漢語熟語）の問題へと一歩進め、ベトナム語、日本語両言語ともに存在する漢字語についてはその意味・用法についての異同を解明し、片方の言語にしかないものについてはその独自の意味・用法と例文を付し、ベトナム人日本語学習者のみならず、日本人ベトナム語学習者にすら有益な資料を提供しようと努めた点も、その漢字語選択に難点があるとは言え、高い評価が与えられるであろう。

ただ、上で見た例のように、日本語の「タ行」で読まれる漢字が、th\_ /t' /よりも tr\_ /c /や d\_ /d /との対応が多いのは一体何故なのか、逆にベトナム語の th\_ /t' /で読まれる漢字が日本語の「タ行」より「サ行」や「ザ行」と多く対応するのは一体何故なのかについては筆者は何の説明もしていない。これらは両言語の漢字音の歴史をひもとけば直ぐに理解できることであり、この点についても審査委員の中から不満の声が挙がった。

更に、対応例の単なる数量化を「統計学的手法」と主張する姿勢にも批判が集まった。また、数量化による日本語漢字学習のステップ分けについても、数量の捉え方が恣意的で、依然としてその基準が不分明なままである点も不満が残った。

しかも最大の問題は、両言語の話者、特にベトナム人日本語学習者にとって「似ている」という感覚から遠ざかる傾向のあるこのステップ分けが、果たして本当に「効果的」な漢字学習の手助けとなるのかである。結局は個々の漢字語で覚えさせるのが最も効果的な方法ではないのかと言う審査委員の意見もあった。

しかし、全体として見ると、本博士論文は、ベトナム人に対する日本語教育、特に漢字教育の実践から生まれた、教育法への提言であり、得られた 3 点の資料とともに、ベトナム人日本語学習者のために有益な手掛かりを提供するものである点で審査委員会委員全員の意見が一致した。

ベトナムにおいては、日本語教育を専門とする研究者は未だ少数であり、筆者の今後の活躍が期待される。

本論文は完璧な日本語で書かれており、筆者の日本語運用能力の高さが十分に発揮されていることを付記しておきたい。